

魔の星を^{ほし}つかむ^{しょう}少年

鈴木悦夫/作・伊藤良子/



鈴木悦夫

NDC 913

魔の星をつかむ少年

学研の新・創作シリーズ 179 P 21cm

1986年 3月10日 初版発行©

定価 780円

著者 鈴木悦夫

検印廃止

発行人 児山敬一

編集人 本郷左智夫

印刷所 中央精版印刷株式会社

株式会社精興社

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5 〒145

振替 東京8-142930

この本に関するお問合せ、製本上のミスなどがありましたら、下記あて文書または電話でお知らせください

東京都大田区上池台4-40-5 〒145

学研「お客さま相談センター児童図書係」

電話(03)726-8124

無断複写複製(コピー)を禁ず

ISBN4-05-102117-3

Printed in Japan

少年がつかむ生

鈴木悦夫/作・伊藤良子/画



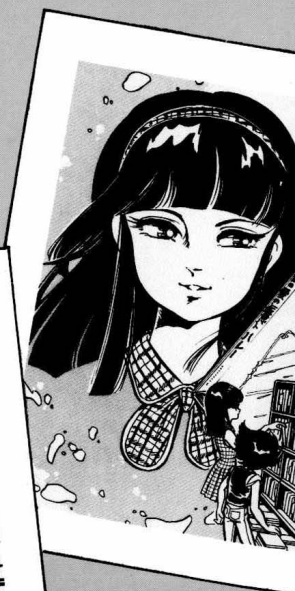
もくじ

- 1 美人先生がおこつたぞ……………5
びじんせんせい
- 2 宇宙をさまようコロンブス……………18
うちゅう
- 3 七十六年前の山火事……………28
ねんまえ やまかじ
- 4 ぼくとデートしてください……………40
- 5 つきあいにくいやつだ……………54
- 6 めちゃくちゃな誕生日……………65
たんじょうび
- 7 黒の集団……………79
くろ しゅうだん
- 8 地下室へ……………99
ちかしつ
- 9 地球の大そうじ……………114
ちきゅう おお





- | | | | | | | | | | |
|----|----------|----|---------------|----|---------------|----|---------------|----|----------------|
| 14 | 愛の星……167 | 13 | 人間どうしだから……157 | 12 | 大将と映子姉さん……147 | 11 | ふたたび地下室へ……137 | 10 | 北アルプスの異星人……121 |
|----|----------|----|---------------|----|---------------|----|---------------|----|----------------|





作者・鈴木悦夫（すずき えつお）

1944年，静岡県に生まれる。早稲田大学卒業。
児童文学者。放送作家。同人誌「鬼ヶ島通信」
同人。最近の児童文学作品に『小さな島のシャ
パ子シリーズ』（小峰書店），『おせっかいな腹
話術師』（小峰書店），『花花こうぼんのチッチ』
（ひくまの出版）など多数ある。

画家・伊藤良子（いとう りょうこ）

1958年，札幌市に生まれる。中央美術学園卒業。
各種の児童雑誌でさし絵を執筆。単行本の作品
には，『ぼくらのミステリー学園』（偕成社），
『ぼくらのミステリー新聞』（偕成社），『SOS！
なぞのパソコンじゅく』（くもん出版）などが
ある。

1 美人先生がおこつたぞ

超能力ちようのうりよくがほしい！

そう思おもっている人ひとはたくさんいる。

けれど、自分じぶんに超能力ちようのうりよくがあるかどうか、本気ほんきで調しらべようとする人ひとは、あまりいない。
たいていの人ひとが、

「超能力者ちようのうりよくしやはとくべつな人間にんげんだ。自分じぶんがとくべつな人間にんげんであるはずがない。」
と、はじめからあきらめてしまっている。

でも、そういう人ひとたちも、もしかしたら、自分じぶんの超能力ちようのうりよくに気きがついていないだけなの
かもしれない。

なかには、思おもいがけないときに、ちょっとしたできごとのおかげで、

「おや!? わたしには超能力ちようのうりよくがあるのかな……」

と、運うんよく気きがつく人ひともいる。



星界小学校五年一組の火ノ瀬流も、そんな運のいい少年のひとりだった。

「きみは先生をからかっているのね。」

担任の月路映子先生が黒板の前から、ゆっくりと流のほうへ近づいてきた。声はこわばっていたけれど、顔にはまだほおえみが少しのこっていた。

「からかってなんかいません。」

流は先生の目をまっすぐ見つめた。

「ほんとうにわすれたんです。」

流のつくえの前で立ちどまった先生の顔から、ほおえみが消えた。

「わすれたなんて、そんなことだれが信じると思うの?」

いらいらした気もちをしずめるように、先生が長いかみの毛をかきあげた。教室の中が

ザワツとした。

「かっこいいよなあ。」

と、だれかがつぶやき、べつのだれかがあいづちをうった。

「おこったときでも、やっぱりすてきなのね。」

先生が声のしたほうを、かるくにらむようにした。それだけで教室中がしずかになった。こわかったからではない。みんな月路先生にだけは、きらわれたくなかったからだ。なにしろ、月路先生はとびきり美人だった。美人で有名な映画スターが、あるレストランで、たまたま近くにすわった月路先生を見て、すっかり自信をなくしてしまい、その日一日、自分の顔をかみにうつす気がしなかった、といううわさがあるくらいだ。

スタイルも、もちろんよかった。どんなスポーツも得意だったし、いくつもの楽器を一流の音楽家のように演奏することもできた。

それなのに、そういうことを少しもじまんしたことがなかった。

そのうえ教え方がじょうずで、ほかの何人かの先生のように、いやみなことをいって、生徒の心をきずつけることもなかった。それどころか、じょうだんがすぎで、どんな生徒とも気楽に遊んでくれた。ぜったいにえこひいきなどしなかった。

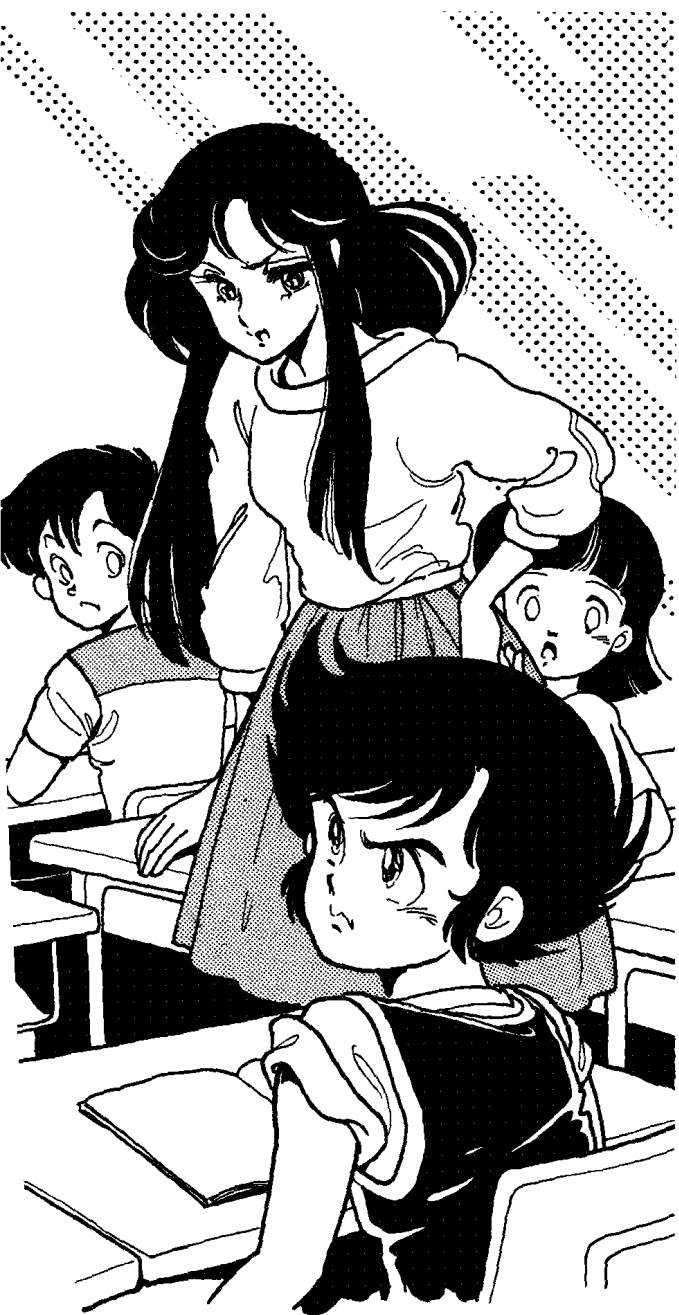
月路映子先生は、生徒たち全員のあこがれの人だったのだ。

「いままでのきみは——」

月路先生が、流の目を見つめかえした。

「一度おぼえたことは、けっしてわすれませんでした。先生がたのあいだでも、きみは天才的な記憶力のもちぬしだということ、たいへん注目されています。そのきみが、きのう聞いたばかりのことをわすれるなんて……」

月路先生がくやしそうにくちびるをかんだ。流はあいかわらず先生を見つめていた。



「先生をからかっているとしたかと思えません。そうでなかったら、先生をばかにしているのね。」

「ちがいます。ほんとうにわすれたんです。」

「わかりました。では、ほかの人にききます。」

月路先生は流にくるりと背を向けると、黒板のほうへ歩きだした。

黒板の前で先生は、五秒間ほどみんなに背中を向けていた。先生がおこってしまったのではないかと心配していた生徒たちには、とても長く感じられる五秒間だった。

が、ふりかえった先生は、いつものとおりのやさしい目をしていた。

「きのう、ハレーすい星についての質問がありましたね。」

流をのぞく全員がうなずいた。

「そのとき先生は、どんな説明をしましたか？」

こんども、流をのぞく全員が手をあげた。名前をよばれた生徒がつぎつぎに立ちあがった。

「ハレーすい星は太陽系の果てから、太陽に向かつてとんできます。そして太陽のまわりを半周すると、また遠い宇宙へとびさります。」

「ハレーすい星は、氷のようなものでできていると考えられています。」

「太陽に近づくと、その氷のようなものはガスとなってとびちります。地球からは、そのガスが長い尾のように見えます。」

「むかしは、ただの流れ星だと思われていました。でも、じつは太陽のまわりをまわっている星だということがわかりました。」

「太陽のまわりをまわっているといっても、地球や火星や木星のように、ほぼまん丸な円をえがいてまわっているわけではありません。ラグビーのボールをたてに切ったような、だ円をえがいてまわっています。」

「そのだ円のはしに、太陽があります。」

「そういうことを発見したのが、エドモンド・ハレーという、イギリスの科学者でした。」
生徒たちの話を整理すると、だいたいこのようなことだった。なかには大さわざをしなから手をあげて、

「みんなのいったとおりです。」

と、とぼけたことをいう生徒もいた。先生に名前をよんでもらいたいだけなのだ。

「太陽と地球のあいだは、一億五千万キロメートルもはなれています。」

ほかに手をあげる生徒がいなかったのをたしかめると、月路先生がしずかに話しはじめた。

「でも、宇宙の広さにくらべれば、太陽と地球のあいだの一億五千万キロメートルなどは、ほんのわずかなものです。だから、ハレーすい星が太陽に近づくということは、地球にも近づくということなんです。」

話しながら、月路先生が流をチラリと見た。流はつくえの上で組んだ両手の指のあたりを、ぼんやりとながめていた。話を聞いているのか、いないのか、なんだかねむたそうな顔をしていた。

「そこで質問。ハレーすい星は太陽のまわりを、何年かかってひとまわりしますか？　つまり、何年に一度地球に近づきますか？　これはきのうも話したんだけど、みんなわすれてしまったようですね。」

自信のなさそうな声が二つ三つしただけで、手はあがらなかった。だれも正確な数字を

おぼえていなかったのだ。

「火ノ瀬くんはおぼえてゐるわね？」

月路先生が流にほおえみかけた。それは、さっき先生をからかったことなど、もう気にしていませんよ、という合図だった。

ところが流には、先生の気もちがわからなかったらしい。だまって首を横にふった。

先生の目に、うつすらとなみだかにじんだ。

「わかりました。もうききません。」

生徒たちは、こんなにもかなしそうな先生の声を聞いたことがなかった。

月路先生は小さなためいきをつくとき、気をとりのおすように、長いかみの毛に手をやって、教室全体を見まわした。

「では、もう一度説明します。ハレーすい星は約七十六年かかって、太陽のまわりをまわります。地球に近づくのも、七十六年に一度ということですね。この前近づいたのは、一九一〇年、明治四十三年でした。こんど太陽にいちばん近づくのは、一九八六年、つまり来年の二月です。」

先生は黒板に図をかきはじめた。

はじめに太陽をかき、そのまわりにいくつもの円をかいた。

「この円は、太陽のまわりをまわる星たちの軌道、つまり通り道です。」

「水・金・地・火・木・土・天・海・冥。」

と、だれかが早口でさげんだ。

「そうですね。太陽に近いほうから、水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、冥王星とならんでいます。軌道の関係で、海王星が冥王星の外に出ることもあるといわれていますが、まあこの順番でいいでしょう。」

先生は冥王星の外がわから、ゆるやかにカーブする線を、太陽に向かってかいた。

「ハレーすい星は、冥王星の外がわで向きをかえて、太陽に向かってとんできます。そのとき、とうぜんこれらの星たちの軌道を横切ることになります。」

ハレーすい星の軌道は、太陽のまわりを半周すると、もう一度ほかの星たちの軌道を横切りながら、ゆるやかなカーブをえがいて、冥王星の外へ出ていった。

「この図でもわかるように、ハレーすい星は、ほかの星の軌道を二回横切ります。という

ことは、地球にも二度接近するということです。こんどの場合は、一九八五年の十一月と一九八六年の四月です。」

そのとき、ベルがなった。

「一生に一度見る事ができるかどうかという星ですから、みなさんもいろいろ調べてみてください。」

と、月路先生がしめくくった。

それを待っていたように、相原恵子という生徒が手をあげた。

「先生、やっぱりおかしいと思います。」

「なにがですか？」

「火ノ瀬くんのことです。みんなも火ノ瀬くんの記憶力のいいことはよく知っています。その火ノ瀬くんが、きのう聞いたばかりのことをわすれるはありません。」

教室のあちこちから、

「そうだ、そうだ。」

という声でした。

